

1/8 詩篇 122 篇 「さあ 主の家に行こう」

小池 宏明 師

今年 2023 年の年間聖句として、詩篇 122 篇 1 節を挙げさせて頂いた。この詩篇の表題は「都上りの歌」と付けられている。この詩篇が作られた時代は、諸説あるが、滅んだ南ユダからバビロンに連行された民が、解放されて、故郷のエルサレムに帰還して、町と神殿を再建した後だと言われている。国が滅び、首都エルサレムが破壊された後、世界各地に散らされていたイスラエルの民は、エルサレム再建の話聞いて、神の宮である神殿に行きたい、主なる神様との親しい交わりを持ちたい、再建された神殿と整えられた街並みを見たい、という強い願いを持ったことであろう。

*御前に集まる喜びと感動

1、2 節「「さあ 「主」の家に行こう。」人々が私にそう言ったとき私は喜んだ。エルサレムよ 私たちの足はあなたの門の内に立っている。」エルサレムに到着した主の民は、城門が開くのを待ち切れずに、朝早くから身支度を開始しただろう。「さあ 主の家に行こう」と民たちは口々に言い出す。詩人は、喜びを噛みしめるかのように「私は喜んだ。」と一言。2 節では、詩人が、よくまとまった都、多くの人々が押し寄せて来る、このエルサレムの都に呼びかけている。そして、私たちの足は「あなたの内側に立っている」と。単純で素朴な表現だが、民たちが「ついに、ここまで来た！」エルサレムの城壁の内側に足を踏み入れることができた喜びと感動が伝わってくる。この当時の民もそうだが、歴史的にも、今日に生きる私たちも、互いに誘い合って、主の家に行こう、共に集まろう、と励まし合って来た私たち「主の民」ではないだろうか。

*新年を迎えた教会でも

新しい年を迎えて、私たちはコロナの禍（わざわい）を乗り越えて、主イエス・キリストを中心とした親しい御ことばの交わり、祈りの交わりを実現して、喜びを分かち合っていきたいと願う。こうして、しばらくお休みしている方々や、大切な家族や友人を教会の交わりにお誘いできるように、積極的に祈り、取り組んでいこう。また、各小グループが、主イエス様を頭とする小さな教会として、集まっては、よく御ことばを学び、よく祈り、愛し合い、受け入れ合い、支え合う交わりへと成長できるように、取り組んでいきたいと願う。